

江戸初期の四国遍路 —澄禅の足跡をたどる—

The Shikoku pilgrimage of the early Edo period – tracing the footsteps of Chōzen.

柴谷 宗叔 (高野山大学密教文化研究所研究員)

Sōshuku SHIBATANI,

Research member of the Mikkyo Culture Research Institute at Koyasan University

By verifying the contents contained within the Shikoku Henro Nikki (1653) by Chōzen (1613-1680), which is presently the oldest genuine historical document about the Shikoku pilgrimage, I could clarify the actual situation of the pilgrimage route in the early part of the Edo period and compare it with the present state. As well, by following the route as recorded by Chōzen and by doing an on-site investigation, I could determine exactly where this old route is and compare it with present-day places and names of temples and shrines. However, he did not follow the presently-common order of starting at Temple 1, Ryōzenji, but, if using the numbers set today, started at Temple 17, Idoji, went to Temple 13, and then proceeded to Temples 11~12~18. After that he went in order and when he finished at Temple 88, went in reverse order from Temple 10 to 1, to complete the circuit. After the publication of Shinnen's (?-1691) Shikoku Henro Michishirube people referred to the path markers recorded there and research on this topic has been already been conducted, but Chōzen's unique route did not have any relics like path markers, so fieldwork had to be carried out by referring only to entries in his diary. This was especially so for the route from Temple 13 to 11 and Temple 12 to 18, which differs from the path formed after Shinnen and which has remained until the modern day, but through this study Chōzen's route has become clear for the first time. As well, for example, a route of mountain ridgeline from Senryūji, the inner sanctum of Temple 65, to Temple 66 as well as a bangai (unnumbered) sacred site called Hotokesaki (Sakihama-cho, Muroto city, Kochi prefecture) between Temples 23 and 24 were newly discovered. Chōzen's route, which pilgrims followed so long ago, could be recreated based on the oldest extant historical document. This type of investigative research of integrating old and present locations along the Shikoku pilgrimage is the first of its kind. As a result, place names recorded in the diary could be compared with present-day places and the names of temples and shrines and their locations, including temples that have fallen in ruin, could almost all be checked and confirmed.

はじめに

四国遍路の本格的史料としては現存最古ともいえる澄禅(1613—80)の『四國邊路日記(四国辺路日記)』¹(承応2年=1653)に記載された内容を検証することによって、江戸時代前期の四国遍路の実態を明らかにするとともに、現在との比較を試みた。澄禅の日記に記載された行程をたどり、現地調査をすることで、ルート確定と現代地名・寺社名への比定をした。その結果、日記に記載されている地名についてはすべて現在の地名に比定することができた。寺社名、所在地についても廃寺を含めほぼ比定できた。

これまで、愛媛県、徳島県教委²などの力で古い四国遍路道の調査が試みられてはいるが、現存する江戸時代以降の標石を元に昭和期まで使われていた道を再現したものである。標石は真念(?—1691)が貞享年間(1684—88)以後に建立したものが最古であり³、真念の『四國邊路道指南』(1687)⁴に記載されたルートにほぼ合致する。しかし、それ以前の道は残念ながらわかっていなかった。従って真念に先立つ1653年当時の遍路道の詳細をたどったのは初めての試みである。

ルートの調査にあたっては、私の得意分野であるフィールドワークを駆使して現地調査を重ね、澄禅の記述を現在の場所に重ね合わせる作業を行った。ルートについては澄禅の記述が飛び飛びであるため一部選択肢が残る部分があるものの、結果を国土地理院の5万分の1の地図上に重ねた。必要な現地写真も添えた。

澄禅の日記に1番から88番までの番付は記載されていない。現在よく巡られている1番霊山寺からの順打ちではなく、現在の札所番号でいけば17番井戸寺から13番まで行き11—12—18番とたどり、以降は順打ちし、88番を終えてから10番から1番に逆打ちで結願するコースを取っている⁵。真念以後の道には標石

が参考になり先行研究もあるが、澄禅独自のルートには標石のような遺物はなく、日記の記述のみを頼りに現地調査をして確定した。これについては既に記したように現在の地名との比定を完全に終えた。特に、13番から11番、12番から18番へのコースは真念以降現在に至る遍路道とは異なっており、今回の調査で初めて明らかにした道筋である。また、65番奥の院から66番への尾根道も新たに発見した道である。

これらの成果を『江戸初期の四国遍路—澄禅『四国辺路日記』の道再現』⁶としてまとめ、出版した。

1 阿波

承応2年(1653)7月18日、高野山(和歌山県高野町)を出発、渋田(同県かつらぎ町渋田)に泊まる。19日に和歌山に入り駿河町(和歌山市駿河町)泊。20日、湊(和歌山市湊)から船に乗るが波浪のため逗留。

24日出船、淡路島、武島(沼島)などを見て阿州渭津(徳島県徳島市)に着く。持明院(廃寺、跡に常慶院滝薬師、徳島市眉山町大滝山)に泊まる。持明院から、霊山寺(1番、鳴門市大麻町板東)から回るより井土寺(17番井土寺、徳島市国府町井土)からの方が良いとの伝授を受ける。

25日、持明院を立ち井土寺に行く。観音寺(16番、同市国府町観音寺)、国分寺(15番、同市国府町矢野)、常楽寺(14番、同市国府町延命)へ。2町ほどの川(鮎喰川)を歩いて渡り、一ノ宮(一宮神社、現在の13番札所大日寺は道を挟んで北側、同市一宮町西丁)へ。もと来た道を帰り川(鮎喰川)を渡った。「阿波一国を一目に見る」峠を越えた。大道(伊予街道)に出て、1里ほど行ってサンチ村(吉野川市鴨島町山路)の民家に泊まった。

峠について、距離・眺望等の見地から徳島市入田町と名西郡石井町の境にある地蔵峠であると推定した。西側の童学寺越えは距離的に合わず、東側の馬場尾越えは眺望が全く利かないからである。

26日、藤井寺(11番、吉野川市鴨島町飯尾)へ。焼山寺(12番、神山町下分地中)へは山坂を3里。「阿波無双の難所也」とある。藤井寺の南の山を登り、峠(柳水庵=神山町阿野松尾=あたり)の先にさらに高い大坂があり、絶頂(一本杉庵=浄蓮庵、神山町左右内=あたり)から谷底に下り、清浄潔斎なる谷河(左右内谷川=垢取川)で手水を使い、30余町登って焼山寺へ。奥ノ院禅定(現存、神山町下分地中)が山上にある。寺より山上へ18町、山上に蔵王権現(現存)。

27日、寺を出て東の尾崎(山の突き出た所。杖杉庵あたり)より真下りに谷底(神山町下分鍋岩)へ。谷川(左右内谷川、鮎喰川)沿いに東へ3里余り行って民家に泊まる(神山町鬼籠野あたりか)。

28日、また谷川(鬼籠野谷川もしくは佐那河内村の園瀬川か)を何度も渡る苦勞をして田野(小松島市田野)の恩山寺(18番、小松島市田野町恩山寺谷)に。恩山寺より東南10町ほどの民屋に泊。神山町と佐那河内村の境にある府能峠を越えたとみられる。

29日、東南1里で立江(小松島市立江町)の地蔵寺(19番立江寺)に。西へ向かい鶴林寺(20番鶴林寺、勝浦町生名鷲ヶ尾)の麓(同町生名)に出る。奥院(現在の慈眼寺、上勝町正木)へは2里、滝(灌頂瀧)の記述も。寺家の愛染院(廃寺、鶴林寺山内)に泊まる。

30日、鶴林寺から下って大河(那賀川)を舟で渡る。細谷川(若杉谷川)沿いに坂を登り、大龍寺(21番、阿南市加茂町龍山)で泊まる。

8月1日、奥院身捨山(南舎心)へ。巖の突き出た所に不動堂。30町ほど下り岩屋(大龍窟という鍾乳洞、現存せず)があった。下って、荒田野(阿南市新野町)の平等寺(22番、同市新野町秋山)へ。平等寺前的大河(桑野川)を渡って河辺の民家(阿南市新野町馬場)に泊まる。

2日、山と海の上り下りを繰り返し川を3瀬(木岐川、北河内谷川、日和佐川か)渡って、ヒワサ(美波町の旧日和佐町中心部)の薬王寺(23番、美波町奥河内寺前)へ。薬王寺から右の道(美波町西河内経由の道か)を1里ほど行って貧乏在家(美波町西河内あたりか)に泊まる。

3日、難所を上下して5里ほど行って、浅河(海陽町浅川)の地蔵寺(廃寺)に泊まる。

4日、寺から一里ほどの海部ノ大師堂(弘法寺、海陽町四方原)という辺路屋で納札。『辺路札所ノ日記』を購入した。大河(海部川)に渡守なし。浦伝いに廉喰(海陽町の旧穴喰町)に至る。辺路屋(円頓寺=廃寺、海陽町穴喰浦)に宿泊を断られる。大河(穴喰川)を渡り、阿波土佐両国境の関所で廻り手形出し通る。坂を越え神浦(高知県東洋町甲浦)へ。千光寺(廃寺、東洋町甲浦千光寺谷)に泊まる。

2 土 佐

5日、雨で正午に出、2里ほど行って野根（高知県東洋町野根）に至る。大河（野根川か）増水して幡多（高知県幡多郡）の辺路衆らと急ぎ渡る。野根ノ大師堂（東洋大師明徳寺、東洋町野根）という辺路屋で泊。

6日、難所の土州飛石ハ子石（飛び石跳ね石ごろごろ石という難所＝東洋町野根から室戸市佐喜浜町に至る海岸）にかかる。難所を3里ほど行って佛崎（室戸市佐喜浜町水尻谷）という奇巖妙石が積み重なった所で札を納めた。10余町行って貧しい漁父の家（室戸市佐喜浜町入木か）があり、ここまで6～7里の間には米穀はないと記している。6里ほど行って漁翁の家に泊（室戸市室戸岬町椎名あたりか）。

佛崎について、現在は番外札所ですらなく、探すのに苦勞した。東洋町から室戸市に入って間もなく、海に突き出た岩が仏像のように見える場所があり、石仏も祀られている所があった。距離的に澄禪の記述と一致する場所で、高知県教委の調査で追認された⁷。

7日は海辺を3里ばかりで土州室戸ノ崎（室戸岬）に至る。薬王寺より21里。東寺（24番最御崎寺、室戸市室戸岬町）の山下の海辺の中央に岩屋（御厨人窟＝御蔵洞、同市室戸岬町）がある。1町ほどで大師修行の求聞持堂（現存せず）。その奥に岩屋（観音窟）。山上への登りは8町。

8日、寺から1里で津寺（25番津照寺、同市室津）へ。1里で西寺（26番金剛頂寺、同市元乙）へ。麓（同市元）の民家に泊。

9日、宿を出て田野（田野町）の大河（奈半利川）を渡し舟で渡り、田野新町（同町新町）から1里行って安田川（現行）を歩いて渡る。神峯の麓タウノ濱（安田町唐浜）で泊まる。神峯（神峯神社、同町唐浜塩谷ヶ森、現在の27番札所神峯寺は少し下った所＝同町唐浜竹林山＝にある）に麓の浜より1里上る。寺は麓にある（養心庵、現在は同町唐浜薬師に移転）。

10日、アキ（安芸市中心部）、新城（同市穴内新城）、砂浜を歩き赤野（同市赤野）の民屋に宿。

11日、小坂を越えて井（香南市手結）へ。1里ほど松原を行って赤岡（同市赤岡町）に出る。1里ほどで大日寺（28番、同市母代寺）。宿泊を断わられ麓の菩提寺（母代寺＝廃寺、同市母代寺）の在所で泊。

12日、雨の中、言云川（物部川）を渡る。民家（香美市の旧土佐山田町）で雨宿り。国分寺の近所の眠り川（国分川）が大水で渡れないため、近辺の田島寺（廃寺、南国市甘枝西島、跡に観音堂）に泊まった。

13日、寺から川下の橋を渡り国分寺（29番、南国市国分）へ。大日寺より直行なら1里。一宮（土佐神社、現在の30番札所善楽寺は東隣、高知市一宮）へ2里。西1里ばかりの小山に華麗な社（掛川神社、高知市薊野中町）。社僧は天台宗日讚（現在の国清寺）。そこから20余町で高智山（高知市中心部）に至る。蓮池町（同市はりまや町）の安養院（廃寺）に泊まる。雨で5日逗留。

19日、川舟（江ノ口川か）に乗って五臺山（31番竹林寺、同市五台山）へ。逗留。

24日、禅寺峯師（32番禅師峰寺、南国市十市）へ2里。1里ほどで浦戸（高知市浦戸）。大河（浦戸湾）渡し舟で自由に渡れる。1里余行って高福寺（33番雪蹊寺、同市長浜）。西1里ほどの秋山（高知市春野町秋山）で泊。間に河2瀬（いずれも新川川）。

25日、（雪蹊寺から）種間寺（34番、高知市春野町秋山）まで2里。西1里ばかりで新居戸ノ渡（仁淀川）。新居戸（土佐市高岡町）の宿に荷物を置いて清瀧寺（35番、土佐市高岡町丁）往復。清瀧寺へ1里。麓に八幡宮（松尾八幡宮、同市高岡町乙）。宿で荷物を受け取り川（仁淀川）沿いに下り新村（同市新居）で泊。

26日、浦伝いに1里ほどで福島（同市宇佐町福島）。井ノ尻瀧ノ渡を舟賃払って渡る。対岸の井ノ尻（同市宇佐町井尻）の宿に荷物を置き青龍寺（36番、同市宇佐町竜）へ25町。7～8町上り7～8町平地へ下る（竜坂）、奥に寺がある。清瀧寺より3里。北東に独鉆嶽があり頂上に石堂（現在の奥の院）。寺に泊。

27日、雨で井ノ尻の漁父の小屋に宿。28日、船で3里入江に行く。奥津横波（須崎市浦ノ内東分横浪）で上陸、陸路20町ほどの大浦（同市浦ノ内西分大浦）の宿で朝食、カトヤ（同市須崎角谷）で休憩し1瀬（新庄川か）渡って、カトヤ坂（角谷坂）を越え谷底（同市安和）へ下って、土佐無双の大坂とされる焼坂（焼坂峠）を越えた。河（久礼川）を渡って久礼（中土佐町久礼）の曹洞宗龍沢山常賢寺（廃寺）に泊。

29日、南西の1里ほどある焼坂に劣らぬ坂（添蚯蚓坂）を越え野を行き、新田ノ五社（仁井田五社＝高岡神社、現在の37番札所岩本寺の北東1.5キロ、四万十町仕手原）へは、左の大道（幡多道）を行って平節（平橋＝四万十町平串）の川を歩き渡る。五社の前にある大河（四万十川）は舟も橋も無い難所で歩き渡る。洪水時には何日も足止めとなる。青龍寺より13里。新田ノ五社は南向に四社並び建ち、一社は小高い山上に建つ。

納札し読経念誦して川渡って戻り窪川（四万十町窪川）で泊。

30日、窪川を出、片坂（現行＝四万十町と黒潮町の境）を越え、大谷川（伊与木川）を何度も渡り下り4里ほど行きイヨキ土井村（黒潮町伊与喜土居）の真言宗随生寺（随正寺＝廃寺）に泊。

9月1日、1里半ほどでサガ（黒潮町佐賀）へ、大坂上下1里半、有井川を渡る。大道（幡多道）より北10町ほどの小高い所に後醍醐天皇一ノ宮（尊良親王）遠流配所の籠御所跡に世話をした有井庄司の五輪石塔がある（現存、黒潮町有井川）。坂を越え川口（黒潮町上川口）、坂越え武知（黒潮町浮鞭）の民家に泊。

2日、鞭を出、中居入野（黒潮町入野）の浜は満潮で通れず野坂を越え田浦（黒潮町田野浦）に出る。海辺を行って高島（四万十市竹島）に出る。高島ノ渡という大河（四万十川）に渡舟無く、通りがかりの舟に頼んで渡る。川向の真崎（同市間崎）の妙心寺流の禅寺、見善寺（廃寺、址に薬師堂）に泊。

3日、津倉淵（四万十市津蔵淵）を過ぎイツタ坂（伊豆田坂）という大坂越える。峠を下り一ノ瀬（土佐清水市下ノ加江市野瀬）に至る、足摺山（38番金剛福寺、同市足摺岬）へ7里。下ノカヤ（同市下ノ加江）を過ぎ入江の松原の奥のヲキ村（同市大岐）で泊。寺山（39番延光寺、宿毛市平田町中山）に行くのにヲツキ（月山神社、大月町月山）、ヲサハ（篠山神社、愛媛県愛南町正木篠山）の番外札所がある。

4日、海辺を上り下りしながらイフリ（土佐清水市以布利）を過ぎ、窪津（同市窪津）には足摺山末寺の海蔵院（現存）がある。1里で津路（同市津路）、さらに1里で足摺山に。5日、6日逗留。

7日、足摺山ノ崎（足摺岬）を回って、松尾（同市松尾）、志水（同市清水）を経て、三崎（同市三崎）の浜で阿波国を同日に出て逆打ちしていた高野吉野の遍路衆と遭う。徳島を同日に出発して逆打ちしている。川口（同市下川口）の浄土宗正善寺（廃寺、跡に大師寺）に泊まる。

8日、10町ほど行き大坂2つ越え貝ノ河（同市貝ノ川）。栗津（同市大津）サイツ野（大月町才角）など経由、浜坂を上り下りして御月山（月山神社、大月町月山）に至る。下の寺に泊る。

9日、御月を出て西泊（大月町西泊）、コヅクシ（宿毛市小筑紫町小筑紫）に出る。イヨ野（同市小筑紫町伊与野）の真言宗瀧厳寺（現存）に泊。御月山より4里。

西泊経由の道は、月山から赤泊経由姫ノ井に出る現在の遍路道とは異なるルート。西泊から周防形、不動滝経由の道をとったかと思われる。

10日、ミクレ坂（三倉坂）を越え宿毛（宿毛市中心部）に。浄土寺（同市宿毛）に荷物を置き寺山（延光寺、同市平田町中山）へ往復2里。宿毛の浄土寺泊。足摺山より寺山まで13里。御月山を掛ければ16里。

11日、寺から1里で小山という所に関所（同市大深浦に松尾坂番所跡）。伊与国松尾坂の下り付に関所（愛媛県愛南町小山）。宇和島藩が番所を置く。坂越えヒロミ（愛南町広見）へ。御篠山（篠山神社、愛南町正木）へはここに荷物を置いて2里行く。ヒロミより1里ほどの城辺（愛南町の旧城辺町中心部）の民屋に泊まる。

3 伊予

12日、城辺の宿を出て観自在寺（40番、愛南町御荘平城）へ。寺山（延光寺）より7里。2里ほど行って柏（愛南町柏）へ。上下2里の大坂（柏坂）越えハタジ（宇和島市津島町上畑地または下畑地）へ。民家に泊。13日は雨で宿に逗留。

14日、宿を出て、津島（宇和島市津島町岩松）へ。野井坂（同市津島町岩淵野井）を越え宇和島（宇和島市中心部）に。（宇和島城下）追手門外に大師堂（馬目木大師、同市元結掛）という辺路家あり。宇和島藩祈願所に地蔵院（地蔵院延命寺＝廃寺、同市大超寺奥の愛宕山麓）、龍光院（現存、別格六番、同市天神町）の両寺。宇和島本町3丁目（同市中央町）の今西伝介という人の所に泊まる。

15日宿を出て北西へ行き、八幡宮（八幡神社、同市伊吹町）に詣で、北西に行つて坂を越え稲荷ノ社（41番龍光寺、同市三間町戸雁）へ至る。田中に在る小さい社。佛木寺（42番、同市三間町則）へ25町。大坂（齒長峠）を越え、皆田（西予市宇和町皆田）の慶宝寺（宝満山慶宝院＝廃寺、址に法蔵寺。同市宇和町皆田稲生）という真言寺に泊。

16日、寺を発つて川（肱川）を渡り、北西の谷の奥の明石寺（43番、同市宇和町明石）へ。仏木寺より3里。卯ノ町（同市宇和町卯之町）を過ぎ、タバ（同市宇和町東多田）に至る。関所がある。戸坂（同市宇和町久保鳥坂）の庄屋清右衛門宅で泊。高野山證菩提院の旦那である。

17日、宿を出、戸坂峠（鳥坂峠）から1里余下り大津（大洲市大洲）へ。大河（肱川）があり、川に渡舟がある。

中村（同市中村）、堀内若宮（同市若宮）を過ぎ新屋（同市新谷）に至る。大道より北 5 町ほどの山際にある瑞安寺（現存、同市新谷甲）という真言寺に泊。18日は同寺に逗留。

19日、寺を発って谷川（矢落川）を 11 度渡って内ノ子（内子町内子）へ。河（小田川）を渡り坂を越え谷沿いに行く。五百木（内子町五百木）、芦ノ川下田戸（内子町吉野川）に至る。川（田渡川）を渡って東北へ行くのが辺路道。西にまっすぐ行けば、カマカラ（内子町吉野川泉にカマガラという場所がある）という山道。1里ほど行って中田戸（内子町中田渡）の仁兵衛宅に泊。20日は雨で宿に逗留。

21日、上田戸（内子町上田渡）、ウツキミトウ（下坂場峠、内子町臼杵）を経て、ヒワタノタウ（鵜田峠）に至る。久間（久万高原町久万）の町を通って菅生山（44 番大宝寺、久万高原町菅生）に泊まる。

22日、寺に荷物を置いて岩屋寺（45 番、久万高原町七鳥）往復。畑川（久万高原町下畑野川）を経て岩屋山へ。大師は 3 里としたが、町石は 75 町である。岩屋寺への途中に仙人ノセリ破り石（奥の院迫割禅定）があり、上に鑄鉄製の厨子（白山権現）がある。ここに札を納める。2町ほど下って仁王門。向かいには 100 丈ほどの石壁で、往生岩屋（現在の穴禅定か）に上って札を納めた。菅生山に帰り泊まる。

23日、寺を発ち北西に行き、御坂という大坂（三坂峠）を越え、エノキ（松山市久谷町榎）を経て、浄瑠璃寺（46 番、同市浄瑠璃町）へ（大宝寺から）5 里。岩屋より 8 里。八坂寺（47 番、同市浄瑠璃町八坂）へ 25 町。10 町ほど行って円満寺（廢寺）という真言寺に泊。

24日、寺から 25 町行き西林寺（48 番、同市高井町）へ。浄土寺（49 番、同市鷹子町）へ 25 町。近くの八幡（日尾八幡神社、同市南久米町）の別当を如来院（同所に薬師堂のみ現存）という。当所久米村（同市南久米町あたり）の武知仁兵衛宅に泊。

25日、宿を出、畑寺（同市畑寺町）の繁多寺（50 番）へ 25 町。石手寺（51 番、同市石手）へ 21 町。10 余町行って温泉（道後温泉）。さらに 10 余町行くと道後の松山（松山市中心部）。松山の三木寺（御幸寺、同市御幸）に泊。

26日、三木寺に逗留し道後温泉で湯治。

27日、柳堤を行き大山寺（52 番太山寺、同市太山寺町）へ。石手より 2 里。和気（同市和気町）の圓明寺（53 番）へ 18 町。北へ行って塩焼浜（塩田のある浜。和気浜塩田を指すか）に出る。堀江（同市堀江町）を経て間ノ坂（栗井坂）に。柳原（同市柳原）、カザハエ（風早郷＝松山市の旧北条市一帯の旧称だが、この場合は旧北条中央部を指すか）経由。この 4～5 里の間は宿を貸さない。山坂（鴻ノ坂）を越え浅波（浅海＝松山市の旧北条市浅海地区）の民家に泊まる。松山より 6 里。

28日、大坂 2 つ越す。菊間（今治市菊間町浜）、新町（同市大西町新町）を経て縣（同市阿方）の円明寺（54 番延命寺）に至る。和気の円明寺より 10 里。別宮の三嶋へ 1 里。三嶋ノ宮（別宮大山祇神社、現在の 55 番札所南光坊の北に隣接、同市別宮町）。別宮というのは、海を 7 里北へ行ったところに大三島（同市大三島町）があり、そこに大明神の本社がある（大山祇神社、同市大三島町宮浦）。別宮は仮に御座する場所であり、本式の辺路は大三島に渡る。別宮に札を納めるのは略義である。2～3 町行って今治（今治市中心部）の神供寺（現存、今治市本町）に泊まる。

29日、寺を発って田中の細道を南に直進して泰山寺（56 番、同市小泉）へ。別宮より 1 里。日暮まで雨は止まず、ここに泊まる。

10月1日、寺を発って南東の方へ行き河（蒼社川）を渡って南の山に上る。山頭に八幡宮（石清水八幡宮、同市玉川町八幡、現在の 57 番札所栄福寺は山の中腹）。泰山寺より 18 丁。山を下りてさらに南へ行き、佐礼山（58 番仙遊寺、同市玉川町別所甲）に登る。歓喜寺（現存、同市町谷）で道筋を教えてもらい国分寺（59 番、同市国分）に。川沿いに 1 里ほど行って醫王山という坂（医王坂、西条市楠の県道 159 号沿いの坂）、20 町もあるだろうか。楠（西条市楠）という里、次に中村（同市三芳中村）という里があり泊。

2日、ニウ川（壬生川）を渡って南へ行く。田中の畔を伝って一ノ宮（一宮神社、現在の 62 番宝寿寺から予讃線の線路を隔てた北側、同市小松町新屋敷一本松⁸）に。国分寺より 4 里。川（中山川）を渡って一本松（同市小松町新屋敷一本松）という村を過ぎて、新屋敷（同市小松町新屋敷）という所に社僧の天養山保寿寺（62 番宝寿寺、同市小松町新屋敷甲）がある。この寺に泊まる。

3日、寺に荷を置いて横峯に往く。まず 10 町ほどで香菌寺（61 番香菌寺、同市小松町南川甲）へ。一ノ宮より 18 町。小松（同市小松町）という所を経て横峯にかかる。横峯寺（60 番横峰寺、同市小松町石鎚甲）は、小松から 1 里大坂を上る。3 つの小坂を上下し、又大坂を上って仁王門。5 町登ったところに鉄の鳥居（星が森、

同市小松町石鏡星森峠)があり、石鏡山を遥拝して札を納めて読経念誦。保寿寺に還り泊。上下6里。石鏡山太権現(石鏡神社本社、同市小松町石鏡山頂)。嶽(石鏡山)まで12里。6月1日以外は山上に登れないので横峰に札を納める。石鏡より吉祥寺までも12里。4日、寺主が引き止めるので逗留。

5日、10町ほど行ってヒミ(同市氷見)の町を過ぎて吉祥寺(63番、同市氷見乙)へ。1里ほど行って前神寺(64番、同市州之内甲)。石鏡山の里坊である。ここにも札を納める。1里ほど行って西條の大町(同市大町)。カモ川(加茂川)を渡って大道(金毘羅街道=現在の国道11号とほぼ並行する旧街道)を行って、5里余りのところにある泉川を10町ほど下って浦ノ堂寺(隆徳寺、新居浜市外浜町)に泊まる。

6日、寺を出て件の川を渡って、上野ノ峠(上野峠)という山道を1里半ほど行き上野ノ里(四国中央市土居町上野)。ここから宇麻ノ郡(宇摩郡=現在の四国中央市)。中ノ庄(同市中之庄町)で宿泊を断られた。三島(四国中央市の旧伊予三島市中心部)まで行って興願寺(現存、同市三島宮川)に泊まる。

7日、寺を出て田畔を行って柏寺(善法寺=同市下柏町)という寺の前を経て坂にかかる。30余町上ってようやく三角寺(65番、同市金田町三角寺甲)に着く。奥院(仙龍寺、別格13番、同市新宮町馬立)へは大山(法皇山脈)を越えて50町行く。辺路修行者の中でも奥院に参詣するのは稀という。峠(堀切峠)から、また深谷の底へつるべ落としの急坂、下ること20余町で谷底に至る。奥院泊。

8日、奥院を発って、足の踏みどころもない細道を20余町行って、阿波と伊与との境(境目峠、集落は徳島県三好市池田町佐野境目)に出る。ここから下って谷川(馬路川)がある。佐野ノ里(三好市池田町佐野)に関所がある。北の山際に辺路屋がある(青色寺=三好市池田町佐野初作)。ここから雲辺寺(66番、三好市池田町白地ノロウチ)の坂にかかる。50町というが三角寺の坂を3倍したような大坂がある。登りきって山上(雲辺寺山)に出る。三角寺からも奥院からも5里である。雲辺寺泊。

行程5里の距離からいって、堀切峠(県道5号の旧道の旧川之江市と旧新宮村の境)から北へ四国中央市金田町半田平山に下り三角寺の道と合流して椿堂(同市川滝町下山)を経由する現在の遍路道でなく、堀切峠から東進し呉石高原(同市新宮町上山呉石)を経由して愛媛・徳島県境沿いに境目峠に至る尾根道を辿ったと思われる。調査の結果、尾根道の存在は確認できた。

4 讃岐

9日、雲辺寺山を出て北の尾崎を50町下る。ここから讃岐である。麓(香川県観音寺市粟井町)から野中を行き小松尾寺(67番大興寺、三豊市山本町辻)へ3里。西へ向かって観音寺(69番、観音寺市八幡町)へ2里。2町ほど上って瑟引八幡宮(琴弾八幡宮、同市八幡町。現在の68番神恵院は観音寺境内。八幡宮は観音寺の西200メートル)。東北に1里行って、本山寺(70番、三豊市豊中町本山甲)で泊。

10日、寺を発って北へ3里行き、弥谷の麓の辺路屋(八丁目大師堂=同市三野町大見=か)に泊まる。

11日、弥谷寺(71番、同市三野町大見乙)へ。仁王門から自然石の階段を寺庭に上る(現在の大師堂)。さらに上って本堂。北へ行って北峯(天霧山)に上る。峠より下り、小さい山(小高い丘のある白方小学校=多度津町奥白方=のあたりか)を越えて白方屏風力浦(屏風浦=多度津町西白方)に出る。御影堂があり、海岸寺(別格18番、多度津町西白方)という。5町ほど行って三角屋敷(八幡山仏母院、多度津町西白方)。大師御誕生所で御影堂がある。北西に5町ほど行って八幡ノ社(熊手八幡宮、多度津町西白方)。ここで泊。

12日、寺を発って東へ行き弥谷の麓を20余町行って万茶羅寺(72番曼茶羅寺、善通寺市吉原町)。寺に荷を置いて出釈迦山(我拝師山、同市吉原町、73番出釈迦寺=同市吉原町=から南東2キロの山上)に上る。寺から18町で昔の堂の跡(73番奥院・捨身ヶ嶽禅定、同市吉原町)。曼茶羅寺の奥院というべき山である。元の坂を下りて曼茶羅寺へ。8町行って甲山寺(74番、同市弘田町)。8町行って善通寺(70番、同市善通寺町)へ。北東(実際は南東)へ1里行って金毘羅(金刀比羅宮、琴平町琴平山)に至る。本坊を金光院(廃寺)という。山は馬の臥した形に見えるから馬頭山⁹という。13、14日逗留。

15日に寺を出て善通寺に帰る。道具を取って東へ18町、金蔵寺(76番金倉寺、善通寺市金蔵寺町)に至る。北東に1里行って道隆寺(77番、多度津町北鴨)へ。

16日、寺を発って北東に行き、円亀(丸亀=丸亀市中心部)に至る。道隆寺より2里で道場寺(78番郷照寺、宇多津町西町東)へ。所はウタス(宇多津)といい、なお行って坂瀬(坂出)を通って大道(讃岐浜街道、県道33号沿い)から右の山際に行く道を上って野沢ノ井(八十場の水、坂出市西庄町八十場)という泉。

金山薬師（金山奥の院・瑠璃光寺、同市西庄町）から流れる水。2町ほどで崇徳天皇（白峯宮、同市西庄町、現在の79番高照院天皇寺は神社をはさんで右に本坊・左に本堂大師堂等）。（道場寺から）2里。東へ行って綾川（現存）を渡って坂を越えて、国分寺（80番、高松市国分寺町国分）まで50町。国分寺泊。

17日、寺を発って白峯に。屏風を立てたような山坂の九折（つづらおれ）を5～6町上る。白峯寺（81番、坂出市青海町）まで50町。白峯より50町で根香寺（82番、高松市中山町）に至る。根香寺泊。

18日、東の浜に下ってカウザイ（高松市香西地区）から南へ向かって、大道（金毘羅高松街道）を横切り3里行って一ノ宮（田村神社、同市一宮町、現在の83番一宮寺の東隣）に至る。北へ2里ほどで高松（高松市中心部）に至る。高松城は昔はムレ高松（牟礼高松＝同市高松町）で、八島（屋島）の南東にあった。高松の寺町（同市番町）にある實相坊（実相寺、同市三谷町、もと三番町にあったのが移転）に泊。

19日、寺を発って、干潮だったので浜を行って屋島寺（84番、同市屋島東町）の麓へ。松原の坂を上って山上へ。5町ほど下って壇ノ浦（現存、現在海はかなり埋め立てられている）に至る。安徳天皇内裏の旧跡がある（安徳天皇社、同市屋島東町）。八栗へは海面6～7町ほど。浜から20余町上って八栗寺（85番、同市牟礼町牟礼落合）に至る。頂上を拜んでまた本堂の前に下る。八栗寺泊。20日、雨天なので逗留。

21日、南東に20町ほど行って六万寺という寺の跡（同市牟礼町田井）。高松より東へ通じる大道（東讃浜街道）に出て志度ノ浦（志度浦、さぬき市志度）に出る。志度寺（86番、同市志度）まで50町。南2里で長尾寺（87番、同市長尾西）へ。寒川古市（さぬき市の旧長尾町中心部あたりか）で宿泊。

22日、宿を出て山路を越え行く。長尾より3里で大窪寺（88番、同市多和兼割）へ。大窪寺泊。

23日、寺を発って谷河（日開谷川）沿いに下る、1里ほど行って長野（東かがわ市五名長野）、尾隠（徳島県阿波市市場町大影）という所より阿州（徳島県）。1里行って関所（阿波市市場町大影南谷）、また1里行って広い所に出る（同市市場町犬墓平地）。（大窪寺から）切畑（10番切幡寺、同市市場町切幡観音）まで5里。切幡寺から25町で法輪寺（9番、同市土成町土成前田）。近所の民屋で泊。24日、雨で逗留。

25日、宿を出て法輪寺へ。熊谷寺（8番、同市土成町土成前田）へ18町。十楽寺（7番、同市土成町高尾法教田）へ1里。安楽寺（6番、上板町引野）へ21町。地藏寺（5番、板野町羅漢）へ1里。庫裏は2町ほど東。黒谷寺（4番大日寺、板野町黒谷）には18町。黒谷参詣往復1里打ち戻り。地藏寺に還って泊。

26日、地藏寺を発って東に一里行って金泉寺（3番、板野町亀山下）へ。黒谷からも1里。東25町で極楽寺（2番、鳴門市大麻町楡段の上）へ。霊山寺（1番、同市大麻町板東）へ18町。霊山寺より南に行くと大河（吉野川）あり。河は雲辺寺麓より流れ出て渭津（徳島市）まで20里。嶋瀬¹⁰を舟で渡る。それから井戸寺の近所に出て大道（伊予街道）を行って渭津に至る。舟に乗って28日に和歌山に着く。

まとめ

澄禅の足取りについてであるが、井戸寺（17番）から打ち始め、一宮（13番）—藤井寺（11番）、焼山寺（12番）—恩山寺（18番）という経路を取っている。恩山寺以降はほぼ現在の行程と同様である。そして大窪寺（88番）を打ち終えた後、切幡寺（10番）から霊山寺（1番）に至り打ち終えている。

澄禅は井戸寺から巡拝を始めることについて「大師は阿波の北分十里十ヶ所霊山寺を最初にして」とし霊山寺から回り始めないことの言い訳をしている。このことから、当時すでに霊山寺を1番にして巡拝することが一般的であったことがわかる。参拝した札所に番号をつけてはいないけれど、最後に世間流布の日記として札所八十八ヶ所と記していることから、現在に通ずる番付がなされていたことは想像に難くない。一方同時に井戸寺から回るのを「中古より以来云々」として持明院から伝授を受けているので、そのような回り方もされていた、つまり必ずしも1番から回らなければならないということではないことがわかる。

他に、現在の徒歩遍路の順打ちの基本コースと異なるところを挙げる。まず、現在と番次を違えている箇所であるが、伊予国分寺（59番）—一ノ宮（62番）—香園寺（61番）—横峰寺（60番）—吉祥寺（63番）の順に回っている。61番から64番は近くに並んでおり、60番のみ距離が離れている所へ登山するので、現在も60番を後回しにする行程が組まれることがある。61番より62番を先に打っているのは今治街道（現在の国道196号沿い）を行った場合、その方が近かったと思われる。61、62番の間は1キロ強しかなく、打ち戻ってほしいことではない。

次に三角寺（65番）の奥院に参詣している。ここは現在も難所とされ訪れる人が少ないが、あえて行って

いる。奥院から雲辺寺（66 番）に至る経路は前述の通り尾根道が現存することを確認した。

琴弾八幡宮（68 番）、観音寺（69 番）の打ち順も日記では逆となっているが、琴弾八幡と観音寺は隣接する境内であり、どちらを先にとする意識はあまりなかったようだ。明治の神仏分離以後は観音寺境内に 2 札所が併存することとなってしまったので、まったく番次の意味はなくなってしまった。日記に番付の記載が無いことと合わせ澄禪自身が番付を重要視していなかったことがわかる。

弥谷寺（71 番）からは曼荼羅寺（72 番）に直行せず、大師ゆかりの海岸寺、三角寺（現仏母院）、熊手八幡などの番外札所を巡ってから曼荼羅寺に至る。また善通寺（75 番）から金毘羅を往復している。金毘羅は現在は四国の札所ではないが、当時の遍路は参詣していたことを裏付けるものといえる。

澄禪の日記は和歌山で終わっている。その後高野山に参ったのか、京都・智積院に直に帰ったかは判然としない。ともあれ四国の札所を回り終えたことで完結しているという意識があることは記載から確かである。

このことから高野山にお礼参りする風習はまだ確立していなかったことがうかがえる。10 月 26 日に霊山寺を打ち終え、和歌山には 28 日着だから、徳島城下で 26、27 日と泊まったと思われるが、記録上からはわからない。巡拜日数は 91 日間と記している。これも四国内のみの勘定である。現在の四国徒歩遍路の平均の日数 40～50 日¹¹の 2 倍ほどかかっている。雨の日は逗留しているし、城下ではゆっくりするなど、現在よりは余裕を持って巡っていたことがわかる。

以上、澄禪が歩いたルートについて、文献と現地調査を交えてほぼ確定するとともに、現在との違いを明らかにした。遍路をしたルートをたどれる現存最古の史料を元にしたルートの再現であり、現在地名との整合性を図った研究は他にない初めての試みである。これについてほぼ確定できたのは、先行研究にない成果であると思う。

¹ 正しくは『四國遍路日記』。「邊」は「辺(邊)」の異体字。本論では引用文は「辺路」と表記、地の文は一般的な「遍路」を用いた。「四國」は「四国」と表記した。以下同じ。底本に塩竈神社（宮城県塩釜市）所蔵の正徳 4 年（1714）写本の影印本（高野山大学図書館所蔵）を使い、宮崎忍勝『澄禪四国遍路日記』（大東出版社、1977）、近藤喜博『四国遍路研究』（三弥井書店、1982）、伊予史談会『四国遍路記集』増訂 3 版（愛媛県教科図書、1997、以下『史談会本』）、小松勝記『四國邊路日記并四國順拜大繪圖』（岩本寺、2010）を参照した。

² 『伊予の遍路道』（愛媛県生涯学習センター、2002）、『徳島県歴史の道調査報告書第 5 集遍路道』（徳島県教育委員会、2001）、『高知県歴史の道調査報告書第 2 集ヘンロ道』（高知県教育委員会、2010）、『四国遍路道学術調査研究会調査研究報告第 1 巻特集香川県下の遍路道の実態』（同研究会、2002）。

³ 喜代吉榮徳『四国の辺路石と道守り』（海王舎、1991）15 頁。

⁴ 底本に『史談会本』を使用。

⁵ 澄禪自身は札所番号を記載していないが、便宜上現在の札番で記した。

⁶ 法蔵館、2014。

⁷ 『高知県歴史の道調査報告書第 2 集ヘンロ道』（高知県教育委員会、2010）。

⁸ 当時は中山川の北（西条市小松町新屋敷白坪）にあったか。

⁹ 現在は象頭山。

¹⁰ 吉野川（当時は別宮川）の隅瀬渡と思われる。鳴瀬と読んで旧吉野川の成瀬渡という説もある。

¹¹ 拙著『公認先達が綴った遍路と巡礼の実践学』（高野山出版社、2007）28 頁。